番　組

一調一管 ― 能『敦盛』より ―

中ノ舞

小鼓　曾和　正博
笛　一噌　庸二

六世澤村田之助三回忌追善

義太夫　一谷嫩軍記
須磨浦組打の段

舞　出雲　蓉
浄瑠璃　竹本駒之助
三味線　鶴澤津賀寿

狂言

源平合戦断章

能『敦盛』問語り　野村　裕基
能『景清』小舞　野村　万作

地唄

古道成寺

舞　出雲　蓉
唄・三絃　藤井　泰和
胡弓　菊武　粧子

ご鑑賞案内

以下に掲げる音楽の歌詞・詞章は、上演に際し流儀により、また、演出の事情により、多少の異同が生じることもあります。なお、話術・話芸本位の間狂言の詞章は割愛しました。この段あらかじめご了承ください。

一調一管　中ノ舞 ― 能『敦盛』より ―

一調一管は、謡が入らず鼓と笛だけで合奏する演奏法。中ノ舞は、緩やかと早くとの、中間の性格とテンポの舞をいう。この曲では平敦盛を想定した演奏。薄化粧をし、お歯黒にした、頬にえくぼを湛えた可憐な美少年は、肌身離さず名笛・青葉の笛を携え、戦に臨んでいた……。はかなく潰えた哀れな若い魂を思い浮かべながらお聴きいただきたく。

能『敦盛』問語り

能一番の中で狂言方が受け持つ役を間狂言（あいきょうげん）といい、いくつかの類型があって、能『敦盛』では『語り問』のひとつ（屋語）で、須磨の里人が、この谷合戦での『敦盛最期』の様子を語る。源九郎義経の常襲に逃げ惑う平家一門。陣中で秘蔵の名笛を不覚にも取り落とした敦盛。源氏方に、「慌てた方」と御ら（おんら）れるは無念至極と、騎を駆けてもとに戻るが、そこで出逢ったのが坂東荒武者・熊谷次郎直実――。笛に殉じた若き貴公子の覚悟の健気さと、荒武者直実の痛恨・戦の非情が浮き彫りとなる。

狂言小舞『景清』

能『景清』は、猛々しさから悪七兵衛と恐れられた平家の侍大将景清が、平家滅亡後は盲（めしい）て日向に零落した、という伝説を踏まえる。その景清が、尋ねきたわが娘との永別に際し、艘として屋島合戦での『兜（かぶと）引き』の武勇伝を語り聞かせる場面。そこを狂言小舞に仕立てたもので、生死を賭けた戦の合間の、ちょっと息抜き的なおかしく味のある逸話を、軽妙でなおえもいえない所作に結晶させ、深い哀情をしのばせる。（敵は武蔵国の住人、三保谷四郎）

『景清』詞章

陸にあがれば源氏の兵　あまするとて駆け向ふ　景清これを見て　景清こなたにこうまれば　主は先へ逃げのびぬ　逆かに隔てて立ち帰り　首の骨こそも汝　恐ろしや　腕の強さといひければ　景清は三保の谷が　強けれと　笑ひて左右へのきにける

義太夫　『一谷嫩軍記』　須磨浦組打の段

源氏と平家が戦った『一谷合戦』で、源氏の侍大将熊谷次郎直実が、平家の公達平敦盛を討ち取る場面。熊谷と敦盛の二役を、素踊りで舞いわけます。今年はご指導いただいた澤村田之助先生の三回忌にあたりますので、先生への追善の気持ちを込めて舞わせていただきます。（蓉）

『一谷嫩軍記』詞章

〈去るほどに　御船を求めて一門皆々船に浮かべる平家の侍大将熊谷次郎直実が、平家の
ば　熊谷も進み寄り　互いに打ち物抜きかざし　朝日に輝く剣の稲妻　駆け
須磨の浦風に　鎧の袖はひら〳〵〳〵群入る千鳥群千鳥むら〳〵〳〵ばっと
ひく汐に　寄せては返り返りては又打ちかかる虎々実々　勝負も果てしあら
ざればいそぎ組まんと敦盛は打物がらりと投げ給へば　此はしおらしと
熊谷も太刀投げ捨て、駒を寄せ馬上作ともすぎと組み　エイ〳〵〳〵の声
のうち互いに鎧を踏み外し　両馬が間へどっと落つる　すわやと見る間に
熊谷は敦盛を取っておさえ
かく御運の極る上は　御名を名乗れ直実が　功名誉れをあらわし給へ　又
今生に何思いを残す御辺　敦盛御爽やかに　必ず達しまいらせん　仰せおかれ
候らへと　懇ろに申すにぞ　敦盛御声爽やかに　「オイ優しき志　敵作ら天晴れ男士　かく情ある武士の手にかかり死せん
こと生前の面目」戦場に赴くより家を忘れ身を忘れ　兼て亡き身と知る
ゆえに思ふおくと更になし　去り乍ら忘れ難きは父母の御恩　「われ討たれ
しと聞き給ければさぞ御嘆き思いやる　せめて心をなぐさむため　討たれし
あとにてわが死骸　必ず父へ送り給われかし　我こそ参議経盛の末子　無官
の太夫敦盛と名乗り給へし痛わしき　木石なら共涙を見る目涙にくれ
けるが　何思いけん引起こし　鎧の袖を打はらい打はらい
此の君一人助けしして　勝軍さに負けもせまじ　折節外人もなし　ひと
まず此処を落ち給へ　サ・早う〳〵ト云いすて、　立ち別れんとする所に
後方の山より武者所　数多の軍兵　ヤアヤア熊谷　平家方の大将を組み
敷き乍ら助けるは　二心にまさまなし　きっぬめ共に逃がすなと　声々に
罵るにぞ　熊谷はへっと計りいかがはせんと黙然たり
〈敦盛聊しとやかに　「とても逃れぬ平家の運命　此処を助かり行く先に
下司下郎の手にかかり死恥を見せんより　早く御身が手にかけて」人の疑い
晴らされたれば　御目を閉じて待ち給へ」　痛わしや
熊谷は御後方に立ち廻り　弥陀の利剣と心に唱名　振り上げは上げ
乍ら　珠のようなる御よそおい　情けなや無残やと胸も張り裂く気後れ
に　太刀振り上げし手も弱り　思いにかきくれ討ち兼ねて　嘆きに時も移る
にぞ　「アヽ遅れしか熊谷　早々首を討たれよ」とねじ向き給う御顔を　見る
に目もくれ心消え　俘　小次郎直家と申す者　ちょうど君の年格好　今朝
軍の先がけして　薄手少々負いたる故　陣屋に残し置くたるさえ　心にかゝる
は親子の仲　それを思えば今ここで討ち奉らば　さぞや御心経盛卿の　嘆き
を思いすごされて　さしもに猛き武士も　そぞろ涙にくれ給へ
〈思ふ直実　悪人の友を捨て　善人の敵を招けとは　此事ト早や首討つて
亡き後の回向を頼む　さもなくば　生害せんとすすめられ　アヽ是非なしと
つっ立ち上り　順縁逆縁ともに菩提　未来は必ず一蓮托生　南無阿弥陀仏
〈〈　首は前にぞ　落ちにけり

地唄　古道成寺

この曲は現存する〝道成寺ものゝ〟の中で最も古いものといわれ、元禄時代（十七世紀末～十八世紀初頭）に京坂の三味線弾きの名手とうたわれた、岸野次郎三作曲と言われてます。後にできた〝新道成寺〟や〝鐘ノ岬〟〈新娘道成寺〉などと区別するために『古道成寺』と名づけられたそうです。
詞章は能の『道成寺』の住僧ワキ）の語りの部分を中心に地唄に仕立て上げたもので、ワキ語りを借りた故に、『語り道成寺』とか、その曲調から『三下り道成寺』の別名もあります。他流では僧と娘の二人立ちのものもありますが、一人立ちとして、新たに演出・振付・作舞したものです。（蓉）

『古道成寺』詞章

〈昔昔この所に　まなこの荘司といふ者あり　かの者ひとりの娘を持つ　また
その頃奥よりも　熊野へ通る山伏あり　荘司がもとを宿とす　年月（をと）
送る　荘司娘寵愛のあまりにて　あの客僧こそ　汝が夫よ夫と　戯れし
をば　幼心に真実と思ひ　明かし暮しておはしける
〈その後娘　夜更け人も静まり　更けゆく鳥鐘　衣紋つくろひ鬢かき撫でて　忍ぶ夜の
障りは　冴えた月影　更けゆく鳥鐘　それに嫌なは大の声　そっとした
人目忍ぶ夜の　憂や辛や　せき来る胸を押し鎮め　かの客僧の傍へ行き
いつまでかくて置き給ふ　早く迎へて給はれと　じっと締むれば　せん方なくも
客僧は　紐の縺れて帯陸帯　二重回りに三重四重五重　七巻まいて　放ち
はせばしとどうき結ぶ　切るに切られぬ　我が思ひ　お馬繋ぐはそら嬉つき
よ　とても寝まうから　せめて請共に　縁は朝顔浅くと儘よ　せめて二夜は寝て
語ろ　後程迄が申すべし　娘真実と思ひて　一間の内に待ちもの　夜半に紛れて逃げて行く
〈その後客僧　しすましたりと　それよりも　夜半に紛れて逃げて行く
〈幸ひは　しばらく息を穢しるる　そは　我れを捨て置き給ふかや
〈所へ娘かけ来たり　エエ腹立ちや腹立ちや　我れを捨て置き給ふかや
ノウノウいかにと御聞き　いづくまでも追っかけ行かん　死なば諸共二世三世
かけ　逃すまじとて追っかくる　なんなく大河は泳ぎ越し　ひらくく息を穢しるる
〈入れかふし日高川の水嵩増さって　渡さべきもあらされば　川の上下彼方
此方と　尋ね行きし方者蛇となって　川へさんぶと飛び込んだり　逆巻く水に
浮いつ沈みつ　紅の舌を巻き　炎を吹きかけ吹きか　なんなく大河は泳ぎ越し　ひらくく息を穢しるる
たて　炎を吹きかけ吹きか　なんなく大河は泳ぎ越し　ひらくく息を穢しるる
下ろし隠し置く　尋ねあわ　男を返せ返せとと　此処の面
つつ怨霊は　鐘の下りしを怪　廊彼処の客殿　くるくるくるくるくる
しみ　龍頭を銜へ七巻きまい　くるくるくるくるくるくる
〈　尾をもって叩けば　鐘は　追ひ巡り追ひ巡り
すなはち湯となりて　遂に　なんぼう恐ろしい物語
山伏取り鎮めぬ
なんぼう恐ろし物語

「古道成寺」　舞・出雲蓉、地方・菊夜雄司、装置精峰（2022年3月27日 紀州道成寺全仏堂前）

出演者プロフィール

曾和正博　能楽小鼓方幸流。父曾和博朗および宗家幸祥光に師事。一九五八年独調、小鍛冶で初舞台。七一年『道成寺』を披く。重要無形文化財『能楽』総合認定保持者。

一噌庸二　能楽笛方。噌流宗家十四世・十三世一噌鉄（の長男）。噌正之助・藤田大五郎に師事。一九五〇年舞囃子『春栄』で初舞台。六一年四月『道成寺』を披く。六七年宗家継承。重要無形文化財『能楽』総合認定保持者。

竹本駒之助　一九四九年竹本春駒の二番弟子として入門。七〇年四世竹本越路太夫の女性唯一の門人となる。九九年重要無形文化財・義太夫部浄瑠璃（保持者・人間国宝）。二〇一七年文化功労者。斯界の第一人者として義太夫協会を牽引。

鶴澤津賀寿　一九八四年竹本駒之助に入門、文楽三味線方の野澤錦糸に師事。八六年初舞台。三味線方鶴澤重輝預かり弟子。九四年駒之助の相三味線。二〇〇二年重要無形文化財・義太夫部三味線（保持者・人間国宝）。

野村万作　能楽狂言方和泉流。六世野村万蔵の次男。一九三四年生。初舞台。五〇年三番叟『奈須與市語』、五六年『釣狐』、六〇年『花子』を披く。二〇〇七年重要無形文化財『狂言』保持者・人間国宝）。六年文化功労者。二二年日本芸術院会員。二三年文化勲章。

野村裕基　能楽狂言方和泉流、祖父万作、父萬齋に師事。二〇〇三年『朝狼』で初舞台。二一年『千歳』、二七年『三番叟』、二二年『奈須與市語』『釣狐』を披く。近年進境著しく、若手ホープとして注目される。

藤井泰和　箏曲生田流・九州系地歌演奏家。祖母阿部桂子・母藤井久仁江に師事。九八三年東京藝大音楽学部卒。同大学院修了。二〇一四年芸術選奨文部科学大臣賞。九年紫綬褒章。二〇年日本芸術院賞。日本三曲協会理事。

菊武粧子　当道友楽会三代目家元菊武厚司の後嗣。二〇一八年菊武を襲名。東京藝大音楽学部『箏曲生田流専攻』卒、在学中に常英賞。二〇年利根邦楽記念コンクール優秀賞。

出雲蓉　三歳から日舞を学び、神崎流宗家・神崎ひでに師事。米国留学中に国際文化交流に関心を持ち、欧米・アジア諸国で地唄舞の公演活動を重ねる。一九八四年、日舞界初の文化庁芸術家在外派遣員としてウィーン国立音楽大学でヨーロピアン・マイムを学び、舞とマイムを融合させた『舞夢の世界』を創造展開。五十五回におよぶ『出雲蓉の会』や、地唄舞をわかって欲しいと希う会などを開催。一方、オペラやミュージカルの振付、外国人門下生の育成にも力を入れる。八七年文化庁芸術祭賞。九五年文化庁芸術祭大賞。九九年芸術選奨文部大臣賞。二〇一五年松尾芭蕉賞優秀賞。二一年舞踊批評家協会賞。

たぬき

那須野

八島

山姥

一谷嫩軍記